

# 亶理町民生委員児童委員協議会

(平成 25 年 10 月 25 日掲載記事)

## (1) 亶理町の概要と被災状況について

人口 3 万 5,000 名、世帯数 1 万 1,000 世帯、面積約 73 km<sup>2</sup>の我が亶理町は気候温暖で、農業・漁業はもとより、仙台まで J R で約 30 分という地の利を生かしての通勤通学に便利な町です。役場は亶理地区にあります。荒浜地区、吉田地区、逢隈地区には各支所があります。大震災の津波による浸水区域は町の面積の半分に及び、荒浜と吉田の海岸地区出の被害は甚大でした。

## (2) 荒浜地区のその後の状況

亶理町民児協では、毎年夏休み中に主任児童委員の指導により、町内 4 地区にある小学校 6 校、中学校 4 校の教職員と懇談会を開催しています。話し合いの内容は、児童生徒に関する情報交換で、特に夏休み中の無事故を願ったものです。

ここでは沿岸部にあつて被災した荒浜地区にある荒浜小学校と荒浜中学校について紹介します。荒浜小学校は、被災後逢隈地区にある逢隈小学校に併設されていましたが、今年度の新学期より今までの校舎を改築して再校されました。荒浜中学校は現在も逢隈中学校に併設されています。これまでの校舎は被害が甚大であったため解体し、同じ場所に現在建設中で、来年度の 10 月に再開する運びになっています。

去る 5 月に行なわれた 2 年ぶりの荒浜小学校の運動会は、これまでの逢隈小学校との合同での開催と違って大変な盛り上がりでした。『荒浜が絆でつながる運動会にしよう』のスローガンによる『浜の子大運動会』は、待ちに待った地元での開催によるところか先生方や児童達はもとより、父母、祖父母、特に父親の集まりである『おやじの会』の盛り上がりはこれまでになく、今後の復旧・復興への意気込みを感じさせるものでした。もとの家を修繕したり、新築したりして徐々にではありますが、荒浜地区に戻り、生活を再開している世帯が増えてはいますが、小中学生の子どもを持つ世帯はいまだに仮設住宅や町内のアパート等からスクールバスを利用しての通学がほとんどの状況です。

先日行なわれた荒浜小学校の家庭訪問・個人面談では、

- ・ 子ども達が楽しく学校に行っているので安心している
  - ・ 防災訓練は今後も継続してほしい
  - ・ 荒浜の自宅に戻ったが地震や津波が心配
  - ・ 友達の家と離れているので友達と遊べない
  - ・ 今後の生活について（住居や進路等）不安
  - ・ 学区内の危険箇所把握や通学路の雑草対応
- というようなことが話題となったそうです。

荒浜支所（新名称：荒浜地区交流センター）は、7月より証明書等の発行業務を再開しましたし、荒浜中学校が再校する来年の10月には、災害公営住宅、保育所も建設され、徐々にではありますが復旧・復興が見え始めてきますので、荒浜に戻って生活を再開しようとする世帯が徐々に増えるものと期待するところです。

### （3）終わりに

震災から2年半が経過し、民児協活動は以前と同様に戻りつつあります。しかしながら新任民生委員・児童委員になって4か月と11日目に被災し、不完全燃焼のまま1期で諸事情により退任せざるを得なくなった委員の心情を思うと、察するに余りあります。

亘理町は、仙台平野を流れる大河「阿武隈川」の河口流域に位置する平坦な土地が大部分の町であるため、津波が押し寄せても阿武隈川に吸い込まれ、被害は少ないものと思われてきました。最近では、犠牲者4名を出した昭和35年のチリ津波地震、昭和53年と平成15年の宮城県沖地震、県内では平成15年の県北部地震と発生していますが、この度のような大津波による甚大な被害は想像を絶するものでした。報道によると約1,100年前の貞観津波や約400年前の慶長地震津波による浸水域は今回と同規模であったと報じていますが、後の祭りの感がします。いかにして被害を最小限に止めるか、行政はもとより、私たち民生委員・児童委員や諸団体の皆様方が知恵を絞って、早期に地震のみならず津波対策も含めた防災計画の作成が必要なものと考えています。そして、気の遠くなることですが、津波の怖さを何世代何百年にわたっても子々孫々に「言い伝えること」こそが私たち民生委員・児童委員に課せられた使命であると思います。

最後になりましたが、全国の委員の皆様からたくさんのご支援、ご協力をいただきましたことに、衷心よりお礼申しあげます。